（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	Eleanor Robinson
論文題目	Nakai Hiromu: Meiji Statesman and Hero of Anglo-Japanese Relations（中井弘：ある日英関係の主人公）		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、幕末から明治前期にかけての志士であり、官僚あるいは政治家でもあった中井弘（１８３８-９４年。桜洲山人と号したので時に中井桜洲とも称される。）の事跡を、主に日英関係と同時代の政治史的文脈の中で辿り、彼の果した歴史的役割について再評価を試みようとするものである。とりわけ、従来日本では、中井に対する関心が決して十分ではなかったことに対する問題意識から、中井が幕末維新期に日英関係史上で果した政治的役割と共に、広く日本と西欧諸国との間の文化交流史上の位置づけを再検討することによって、中井の歴史上の評価と人物像の修正を試みている。

本論文の構成は、序章と結論を含め全部で５つの章から成っており、巻末にappendices（付録）として、中井の洋行時の日記『西洋紀行―航海新説』（以下、『航海新説』と略す）の全訳（英文）と共にイギリス公使サー・ハリー・パークスの書簡（３通）と写真を付加している。序章においては、すでに見た本論文の目的に加えて、中井の生きた時代の日本の歴史状況を説明している。さらに先行研究紹介を兼ねて中井に対する後世の関心の低さについてもその問題性を強調している。

次いで本論文は、幕末ペリー来航以前の時期からの日英関係の歴史的文脈の再検討を試みると共に、中井の本格的な研究の乏しさの背景について研究者の注意を再び喚起している。併せて、本論文で用いられる方法論について説明し、本論文では３つの大きな柱が、中井と日英関係をめぐる問題の考察に当って立てられていることを予め提示する。すなわち、第１の柱として１８６６（慶応２）年の中井のイギリス留学を取り上げ、『航海新説』の分析と考察を挙げている。第２に、帰国後新政府に出仕した中井が遭遇した、いわゆる「縄手事件」をめぐる日英関係の局面に焦点をあて、この事件を詳しく扱うことの意義を説明している。そして第３の柱として、中井が関わった鹿鳴館での交流事業と共に、中井をめぐる政界指導者やその他の内外の多くの人物との人間関係を考察することで、最初の渡英以来、中井が日英関係において果した役割の全体像を再確認するとしている。

以上のように、序章において予め論文全体の構想とその狙いについて触れたあと、第１章において本格的に『航海新説』の分析に入る。同書を詳しく検討し、渡英の途上、中井が書き記した各種の見聞から、本論文は中井の開化主義者としての文明観の形成に注目し、その点を詳細に分析している。すなわち、この航海を通じ、「文明」と「未開」という対置を中井が自らの視座として身につけていった過程や、日本の急速な「開化」の必要を認識してゆく過程が詳しく描かれている。併せて、近代技術や航海術を、イギリスを始めとする西洋諸国から移入することへの中井の強い関心が喚起されてゆく様子を描き出している。そこで本論文は特に、中井の内面に一貫してあった西欧あるいは一般に外国の事物・習慣に対する明らさまな軽侮と反発という彼自身の強固な感情と、近代化のために西欧の技術文明移入の必要性に対する認識、さらには前述の「文明」と「未開」という彼が身に付けつつあった認識枠組みとの間の興味深い乖離に注意を喚起している。また、本章では中井の作った『航海新説』の中にある多くの漢詩を取り上げて、その分析に紙数を割いている。さらに本論文は、帰国

後の中井が坂本龍馬の有名な「船中八策」に及ぼした影響について論証する。それは主に、時系列的な側面と、思想や制度の構想あるいは用語に関わる類似性の両面から、「船中八策」に対する中井の影響の蓋然性を主張している。

第２章は、１８６８年に京都で起った「縄手事件」を中心的テーマとして扱っている。すなわち同年３月２３日、京都御所へ参内途中のイギリス公使パークスらの行列に対する攘夷派の浪士による襲撃事件が起ったが、当時、外国公使応接掛（外国事務御用）の任にあり行列に同行していた中井が、負傷にも屈せず、浪士達と闘ってこれを倒しパークスを守った。本章ではこの劇的な出来事が日英関係やその後のイギリス人の中井に対する信頼や評価に重要な位置を占めていることを強調する。さらに本論文は、この事件が同様にその後の日英関係全体にも大きな影響を及ぼしている可能性に言及し、この面から従来の日本における研究関心の欠如を指摘している。

第３章では、本論文が上記第３の柱と考える鹿鳴館をめぐる問題に焦点をあてている。すなわち、中井が命名者とされる鹿鳴館の活動と共に、同時代そして後世の鹿鳴館に対する歴史的評価を再検討する。併せて中井弘の広汎な人間関係の実態とそれが日英関係と日本の政治に対して持つ意味についても詳しく分析している。とくに本論文は、鹿鳴館の果した役割について、同時代と歴史研究者の評価が必ずしも適切なものではなかったことを問題とし、新しい観点からの鹿鳴館の再評価の必要を訴える。同時に、中井弘の従来から流布してきた人物像についても修正の余地があることを示して、幾つかの留保を付加しつつ、中井の伊藤博文や原敬など多くの日本の政治指導者との濃密な人間関係の中に、後世の日英関係の展開を説明する上でも重要なヒントがあるとし、中井弘研究の重要性を強調している。

結論の章では中井の残した各種の「遺産」としての業績に触れ、同時に今後の中井弘研究のあるべき方向性と可能性に説き及んでいる。末尾に、『航海新説』の英訳（全文）が、パークス公使の報告書簡及び２２枚の中井の事跡に関する写真と共に付け加えられている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、従来、ごく断片的な研究しか行われてこなかった幕末明治期の政治外交史上の「忘れられた大物」、中井弘を取り上げ広く基礎資料を渉猟して論証を重ね、その再評価を大胆に打ち出した意欲的でオリジナリティの高い業績と言える。たしかに、近年ごく一部で中井に対する研究者の関心の端緒が生まれつつあるが、本論文は早くからこの中井に着目してきた蓄積をもとにしており、まとまった形での学術的研究としては内外を通じ初めての試みと言うことができる。そもそも、従来多くの研究者が中井を積極的に取り上げてこなかったのは、それだけ中井に関する探求には多くの困難がつきまとっていたからである。１つには、その活動の実態や背景、人物像には、何らかの意味で、多くの謎が残っており、その解明にはいわゆる一筋縄ではゆかない壁が数多くありそうに思えたからである。もう１つは中井に関する信頼できるまとまった同時代の記録・資料が、国内外にわたって不思議なほど少ないという事情が挙げられる。他方、中井弘という人物の経歴や事跡、とりわけ公式・非公式両面において彼が日英関係において果した、あるいは果したと考えられる役割は決して小さなものとは思えない。つまり、その意味で彼は研究上、決して「忘れられてはならない」人物なのである。本論文は、中井をめぐるこうした研究状況に果敢に挑戦し、丹念に資・史料を収集し粘り強くその解明に取り組んだものとして高く評価しうる。

また、本学位申請者は西欧文化圏に属する外国の出身者として、長年にわたる忍耐強い努力を通じ漢詩の分析・鑑賞力、毛筆記録のスムーズな読解力が求められるこのテーマの研究に従事した結果、その成果として本論文は、今後の中井研究に１つの重要な先鞭をつけるものとなっている。さらに本論文の巻末に付加されている『航海新説』の全訳（英文）は国内外を通じ初めての試みであると共に、今後の外国における日本研究の進展に大きな寄与をなしうる書誌的貢献といえる。また本論文自体が、英語圏における１９世紀日英関係史研究あるいは広く同時期の日本研究一般にも貢献するところ大と見られ、１日も早い出版を求める声が少なくない。

ただ、こうした全体的な評価とは別に、本論文には個別的な点で解明の不足や論証の不十分さも指摘される。とりわけ、１８６６年の中井の最初の渡英の目的が完全に解明されないままになっていることは、本論文が『航海新説』を中心にしたこの時の渡英経験を所論の柱の１つとしていることに鑑みれば、残された大きな問題点といえるかもしれない。また、本論文が中井の「人間関係」を中心に、その政治的役割や歴史的評価を論じようとするアプローチをとっているのであるから、後藤象二郎や坂本龍馬を始めとする土佐の開明派との関係はより詳しく解明されていて然るべきであるが、この点も不十分である。同様のことは、英国商人ウィリアム・オールトとの関係や、薩摩の西郷（隆盛）系の人脈に属する人々の間に残された中井に対する低い評価、あるいは何らの意味での否定的な視線の背景には何があったのか。これらの点での解明に不十分さが見られる。また、本論文が提起している、坂本龍馬の「船中八策」の起草に際し中井が重要な影響を及ぼしたとする新しい知見には、そう断定しうるだけの因果関係の論証がいまだ完全とは言えない面がある。

以上の諸点は、どちらかと言えば個別的な問題点であるが、全体の叙述に関しても背景としての政治史的考察や説明がやや不足している嫌いがあることも付け加えられる。たとえば、第２章の縄手事件をめぐっては、当時の日本の政治状況やイギリスの対東アジア政策の路線転換の動きなどについて、さらに紙数を割いた叙述が必要である。他方、本論文が第１章の『航海新説』の分析を通じて提示している中井の人間像の叙述には大変興味深いものがあり、重要な知見となっている。とくに、中井が抱い

ていた排外的な感情と、西欧技術文明への強い関心やその移入の必要性に対する明白な認識との間に見られる内面の矛盾と葛藤を描き出している個所などは、その一例といえる。さらに縄手事件における中井の行動に対するイギリス側の評価の重要性を指摘している点は、幕末維新期の日英関係の心理構造のあり方や、その後の日英関係全体にこの事件が占めた位置の大きさについての従来の研究上の不備を補う重要な知見といえる。これらは、鹿鳴館が果した役割の再評価の必要性を提示した点と並んで、政治・外交史から文化交流史あるいは文明史の分野にまでわたる学際性豊かな考察となっていると評価しうる。

以上の諸点を総合すれば、本論文は個別的にはなお多くの改善を要する点があるとしても、全体としては明白なオリジナリティと重要な学術上の貢献を行っているものと言うことができる。以上のことから、本論文は共生文明学専攻現代文明論講座の理念にふさわしい研究であり、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成２４年２月６日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降